エルサレムの町

「こうしてダビデはこの要害を住まいとした。このため、これはダビデの町と呼ばれた。彼は、ミロから周辺に至るまで、町の周囲を建て上げ、町の他の部分はヨアブが再建した。」(歴代誌第一11:7-8)

エルサレムの町の歴史

エルサレムの町が最初に記録されているのは創世記14章18節で、メルキゼデクがシャレム(エルサレム→創14:18注)の王として描かれているところと思われる。イスラエル人が約束の地に入るためにヨルダン川を渡ろうとしていたとき、この町は「エブス人のいる・・・地」(ヨシ15:8)または「エブス」(Ⅰ歴11:4)と呼ばれていた。けれどもヨシュアがカナンの地を征服したときには占領されないで、ダビデが王になるまでカナン人の手の中にあった。ダビデの軍隊がエブスを攻撃して占領してから、ダビデはそこを首都にした(Ⅱサム5:5-7, Ⅰ歴11:4-7)。エルサレムは王国が統一されていたときには政治の首都だったけれども、王国が分裂した(分裂の背景と詳細 →Ⅰ列緒論, Ⅱ列緒論, Ⅱ歴緒論 →Ⅰ列12:-14:, Ⅱ歴10:-11:, 要約と図解 →「**イスラエルとユダの王国**」の地図 p.570)あとも引続き南(ユダ)王国の首都だった。ダビデの息子のソロモンは王位を継いで、エルサレムに主の神殿を建設した(Ⅰ列5:-8:, Ⅱ歴2:-5:, 「**神殿**」の項 p.707, 「**ソロモンの神殿**」の図 p.557)。こうしてこの町は神を礼拝するための宗教的中心地にもなった。

イスラエルが神に背き続けたために、前586年にバビロニヤのネブカデネザルがこの町を包囲して、ついにその神殿もろとも破壊するのを神は許された(Ⅱ列25:1-11, Ⅱ歴36:17-19)。ユダヤ人(バビロニヤ人によって捕えられ捕囚にされていた人々)が紀元前536年に神殿とこの町を再建するためにペルシヤの地から戻るまでは、エルサレムは依然として廃墟だった(エズ3:8-13, 5:1-6:15, ネヘ3:-4:)。その後新約聖書の時代までに、エルサレムは再びユダヤ人の政治と宗教生活の中心になった。けれどもローマの政府に対してユダヤ人が何回も反抗したために、この町と神殿は紀元70年に再び破壊された。

ダビデがエルサレムを首都にしてから、この町はいろいろな名前で呼ばれるようになった。それは「シオン」(Ⅱサム5:7)、「ダビデの町」(Ⅰ列2:10)、「聖なる都」(ネヘ11:1)、「神の都」(詩46:4)、「大王の都」(詩48:2)、「正義の町、忠信な都」(イザ1:26)、「**主**の町」(イザ60:14)、「**主**はここにおられる」(エゼ48:35)、「真実の町」(ゼカ8:3)などで、町の性格を表している。いくつかの名前は新約聖書の黙示録に描かれている未来のエルサレムの町を預言したものである。

イスラエル人にとってのエルサレムの意義

旧約聖書の中でエルサレムの町は神の民にとって特別な意味を持っていた。

(1) カナンの地との境界線でイスラエル人に再度律法を教えられたとき、神は将来のある時期にご自分の「御名を置く」場所を選ぶとモーセを通して預言された(申12:5, 11, 21, 14:23-24)。その場所がエルサレム(Ⅰ列11:13, 14:21)で、そこに生きておられる神の宮が建てられた。こうしてその町は「聖なる町」、「神の都」、「**主**の町」と呼ばれるようになった。イスラエルの男子はみな毎年3回エルサレムへ旅行して、「種を入れないパンの祭り、七週の祭り、仮庵の祭りのときに、あなたの神、**主**の選ぶ場所で、御前に出なければならない」(申16:16, ⇒16:2, 6, 15, →「**旧約聖書の祭り**」の表 p.235)と言われていた。

(2) エルサレムは神がご自分の民にメッセージを啓示された町だった(イザ2:3)ので、「幻の谷」(イザ22:1)と言われた。そこはまた神がご自分の民イスラエルを治められる場所だった(詩99:1-2, ⇒詩48:1-3, 12-14)。だからイスラエル人は「町・・・に向かって」祈るように命じられている(Ⅰ列8:44, ⇒ダニ6:10)。エルサレムの周りの山々は主が永遠に人々を取囲んで守っておられることを象徴していた(詩125:1-2)。つまりエルサレムは、神がご自分の民に望んでおられること全部を象徴するものだった。だから神の

民はエルサレムにいるときにはいつも、神の権威、力、聖さ、真実、そして自分たちの神であることを思い返すべきだった。

(3) 神の民が絶えず反抗して偶像礼拝に強く引かれ、命令に従わないで神との関係を損なったとき(「偶像礼拝」の項 p.468)、バビロニヤ人が来て神殿とともにエルサレムを破壊することを主は許された。ご自分が絶えず臨在していることを長期間象徴してきたものが破壊されるのを許すことによって、神はご自分の民から身を引かれたことを知らせようとされたのである。ご自分の民との「とこしえの契約」という約束は人々がいつも神に従うことを条件にしていた(→「**イスラエル人との神の契約**」の項 p.351)。もし神の祝福と約束を引続き体験したいなら、神に対して忠実であり続けなければならないと、神は当時の人々に警告されたけれども、今日の信仰者にも同じように警告し続けておられる。

キリスト教会にとってのエルサレムの意義

エルサレムの町は、キリスト教会にとっても重要だった。

(1) エルサレムはキリスト教の誕生の地だった。そこでイエス・キリストは十字架につけられ、死からよみがえられた。そして高く上げられた(賛美と名誉とともに引上げられた)。キリストが五旬節の日に弟子たちに聖霊を「注がれた」(奉仕のために満たし力を与えられた　使2:)のもこのエルサレムだった。その町からイエス・キリストのメッセージは「地の果てにまで」広まった(使1:8, ⇒ルカ24:47)。エルサレムの教会は新約聖書の全部の教会の母教会であり、弟子たちの最初の指導者である使徒たちの母教会でもあった(使1:12-26, 8:1)。主イエスを信じた異邦人(ユダヤ人以外の人々)もユダヤ教の律法を守らなければならないかという議論が起きたとき、エルサレムでこの問題を解決するための最初の重要な教会会議が召集された(使15:1-31, ガラ2:1-10)。

(2) 新約聖書の著者たちは旧約聖書にあるエルサレムの意義のほとんどを受入れていたけれども、天の都を示す象徴であることも認めていた。つまり新約聖書がエルサレムを「聖なる都」と言うときは単に地上の場所のことを言っているのではなく、神が住み、キリストが神の右(最高の名誉と権威の場所)で治めておられる天を指していたのである。そこから主イエスは祝福を送り、そこから再び来られるのである。パウロはエルサレムについて、「上にあるエルサレムは・・・私たちの母です」(ガラ4:26)と言っている。新約聖書のヘブル人への手紙の著者は、救いを求めてイエス・キリストのところに来る信仰者は地上の山ではなく、「シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム・・・に近づいているのです」(ヘブ12:22)と教えている。そして、神は忠実な弟子たちのために地上に都を準備するのではなく、やがて「夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来る」新しいエルサレムを準備しておられるのである(黙21:2, ⇒黙3:12)。その大いなる日に神の契約は完全に成就される。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられ」る(黙21:3)。黙示録はまた「神と小羊との御座が都の中にあって、そのしもべたちは神に仕え」(黙22:3)、神とともに永遠に治めると言っている。

(3) エルサレムという地上の町は神の未来の千年王国(または「千年期」, 反キリストの勢力に勝利して最後の審判の前にキリストが地上に再び来られ1,000年間治めるとき →イザ11:1-11, 黙20:)でも役割を持っているのだろうか。イザヤは「新しい天と新しい地」について預言をしたけれども(イザ65:17)、現在のエルサレムは神のご計画の成就の中でなお役割を持っていると示している。イザヤ書65章の残りの部分は千年王国(キリストが地上で1,000年間治めるとき)の状態を取扱っている。多くの人はキリストが地上を治めるために再び来られるときには(黙20:1-6)、ご自分の御座をエルサレムの町に置かれると信じている。大きな白い御座のさばきの後(黙20:11-15) ── これはキリストを拒んだ人々全部(そして千年期にキリストを受入れた人)の最後の審判であるけれども ── 新しいエルサレムが天から新しい地に下ってきて神の永遠の王国の本部になる(→黙21:2注)。